

Edward J. McCaughan,

*Reinventing Revolution:
The Renovation of Left Dis-
course in Cuba and Mexico.*

Boulder: Westview Press, 1997, xiii + 207 pp.

狐 崎 知 己

I

冷戦体制の終焉と新自由主義イデオロギーの攻勢を前に、パラダイム全体の喪失状態に陥ったラテンアメリカの左翼陣営は再生しうるのか。世界を表象する思考様式と言説を取り戻し、ラディカルな変革プロセスのなかで果たすべき役割を再び担うことができるのだろうか。本書の書き出し部分でなされる一連の問いかけは、ロヨラ大学社会学部の助教授であり、1968年世代の新左翼知識人として自らラテンアメリカの左翼運動にコミットしてきた著者の自問でもある。本書は、これらの問いを共有するキューバとメキシコの代表的左翼知識人・活動家74名との間で重ねられた対話を通して、パラダイム革新へ向けてのひとつの視座を提供するものである。

このような試み自体は目新しいものではない^(注1)。メキシコの政治学者ホルヘ・カスタンニェーダはベストセラーとなった『解体されたユートピア：冷戦後のラテンアメリカ左翼』において、キューバ革命以来のラテンアメリカ左翼の言説と運動の系譜を辿った末、生命と資産のすべてを投げ打ってでも達成すべき、ラディカルな変革の可能性をはっきりと否定している。1980年代までは左翼としての集合的な言説、革命的ユートピアという想像の共同体が存在し、キューバを拠点とするアメリカ大陸レベルの革命組織のネットワークを経由して社会的な影響力を放っていた。これが解体された今日、資本主義市場経済

の枠内での改良主義、それも影響力がローカルなレベルに限定された小さな試みに閉じこもる左翼知識人・活動家の姿が、否応なくカスタンニェーダの著作に書き記されている^(注2)。解体 (disarmed) されたのは、武装闘争という手段のみならず、政治目的として民衆に提示されるべき革命という大きな物語、ユートピアそのものである。マコーガン自身、現状ではプラグマティックな改良主義がラテンアメリカ左翼の主流であることを認めながらも、あくまでウォラーステインの標榜する「反システム」に同調し、長期的視座から平等・社会的公正・民主主義を基本的な価値に据えた非資本主義世界—システムの構築戦略を目指して、左翼言説の革新を探究する。

他方、新自由主義陣営からは、ラテンアメリカの左翼・学生の間で長期にわたって大きな影響力を与えてきた、主に1968年世代からなる知識人とその著作を嘲笑・罵倒した『完璧なバカになるためのマニュアル』が、これまたベストセラーとなった^(注3)。こちらは経済自由主義を掲げて、ゲバラやカストロらの著作、従属論や解放の神学の代表的イデオログとこれらに共通する反米ナショナリズムへの非歴史的・外在的批判を繰り返しているにすぎない。

だが、この種の書物が巨大な資本と流通・宣伝網に支えられ、国境を越えて大量に流通するという事実は、著者が社会経済構造と言説的表象の双方向的な関係を強調し、反システム戦略形成の仲介を目的に言説の革新を目指しているだけに軽視しえない。左翼言説を伝える活字媒体の衰退とオーディエンスの変化は急速に進行中であり、著者が目指す言説の革新に対応したヘゲモニー形成の手法と媒体の革新に関する考察不足は、本書の弱点の一つとなっている^(注4)。著者は両国の革命プロセスを通して形成された社会正義と連帯の精神が国民文化とコミュニティ感覚のなかにしっかりと根づいていると主張するが、その根拠となるべき文中の例示は説得力に欠けている。市場原理主義がもたらす公的活動・生活の衰退と私主義の蔓延はメキシコのみならず、市場志向の改革が進み、ドル保有量にもとづく格差が民衆一般の間で広がりつつあるキューバにおいても顕在化しつつある。

II

著者は「左翼」を社会的平等と社会正義を重視するイデオロギー的倫理的な原則によって導かれてきた幅広い勢力と規定し、マルクス主義者、社会主義者、共産主義者、社民主義者、革命的民族主義者、ポピュリスト、労働運動や社会運動の活動家らが含まれるとする。この定義は的外れとは言えないだろうが、ここで例示されているラテンアメリカの「……主義者」や活動家の間には歴史的に反目・抗争こそあれ、共通性を見出すことは難しい。

このようにかなり幅広い意味で左翼の定義を行ったうえで、本書は、冷戦後のキューバとメキシコにおける左翼勢力を民主主義、社会主義および国家主権からなる3つの座標軸上の配置から正統派とリベラル派（社民派）、ならびに革新派の3グループに分類し、正統派とリベラル派の限界を示して、革新派こそが左翼再生の担い手であるという議論を展開する。この分類は、74人との対話を通して帰納的に抽出されたというよりも、著者が当初から想定していた革新派の存在を浮き立たせるために、図式的に設定された印象を受ける。国家主権を含む座標軸の選択と定義そのものは的確だが、74人に関する知的情報と選択理由、ならびに3グループへの帰属が明らかにされないまま断片的証言が各章に挿入されている点は読者に不満を与えるばかりか、方法論上の混乱もきたしている。革新派に含まれる知識人・活動家に焦点をあて、彼らの言説と活動戦略、支持基盤、正統派やリベラル派との同盟の可能性などを掘り下げたほうが、他国との比較のうえでもより参考になったと思われる。

本書の構成は以下のとおりである。

- 序章 グローバル変化、パラダイム危機、左翼言説の革新
- 第2章 背景：革命の1960年代からネオリベラルの1980年代へ
- 第3章 民主主義Ⅰ：社会主義およびリベラル正統派の存続
- 第4章 民主主義Ⅱ：民主主義の革新的展望

第5章 社会主義Ⅰ：国家対市場

第6章 社会主義Ⅱ：経済的オルタナティブへの革新的展望

第7章 国家主権Ⅰ：冷戦後のグローバル化した世界＝システムにおける国民国家

第8章 国家主権Ⅱ：国民国家の相対的自律性へ向けて

第9章 結論：不完全な過去、緊張の現在、条件付き未来

本書の読者の関心は革新派とリベラル派の言説の相違にあると思われるので、この点を中心に内容紹介を行う。正統派ないし旧来のパラダイムとは、二段階戦略（国家権力の掌握を通じた社会変革）、前衛政党主義による議会制民主主義と市民社会の自律性の否定、ならびに国家中心型計画経済を信奉し続ける派を意味し^(注5)、キューバでは依然として権力中枢を占めているという。

序章では、本書の方法論が示されている。キューバとメキシコの選択理由は、両国ともに旧来のパラダイムによる革命と開発戦略を通して世界システムの周辺から半周辺への上昇に成功しており、その結果、権威主義的な国家＝党体制が構造化し、今や旧来のパラダイムがもつ最も深刻な欠陥に直面している点にある。74人との対話は、国家の役割（経済計画と市場）、民主化（国家-党-市民社会の関係）、新たな変革の歴史的主体、イデオロギーの役割、冷戦後の国際情勢の5項目をベースに行われた。

第2章では、両国の革命が国家＝党官僚への権力集中に向かい、政治体制への民主的諸要素の導入が排除され、指導部と民衆が完全に離反してゆく歴史のプロセスがまとめられている。グローバリゼーションの加速化と世界経済の再編、新自由主義イデオロギーの興隆、ならびに東側の突然の崩壊という1980年代末の3変動は、あくまで旧来パラダイムへの最後の一撃であり、著者によれば、キューバ革命は60年代末から70年代初頭にかけてすでに死期を迎えていた。にもかかわらず両国ともに体制に批判的もしくは反体制的な左翼であっても、1990年代に至るまで旧来パラダイムがもつ国家中心主義と経済計

画を信奉したままであったという。

III

第3章と第4章では、民主主義をめぐるリベラル派と革新派の相違が示されている。ラテンアメリカではリベラリズムと国家主義の対立を基軸に、民主主義が、ブルジョア対社会主義、形式対実質、排除対参加といった形容詞を伴う二項対立に還元されて論争の対象となる時代が続き、左翼勢力は一般にリベラル民主主義を軽視・蔑視してきた。だが、権威主義体制のもとでの弾圧と闘争をくぐり抜けてきた左翼の中から、政治領域における民主主義と市民社会の自律性を社会経済秩序とは切り離して捉え、民主化を公正な選挙の実施と市民的権利の保障と同一視して評価するリベラル派が浮上し、代表的な左翼知識人の多くがこの流れに加わった。メキシコではPRI（制度的革命党）による国家＝党体制への対抗戦略として、政治的民主化と自由な選挙の実施が重要なイシューとして浮上し、相互に抗争を続けていた共産主義者、革命的民族主義者、ならびに1968年世代を起源とする新左翼諸派からなるPRD（民主革命党）の結成へ至る。これが現在、最大野党へと成長し政権の座が近づくにつれ、PRD内部でリベラル派と革新派の対立が深刻化しているように思える。キューバではリベラル派の影響力はきわめて限定されているものの、党内部のブルーリズムの促進、秘密投票、体制と異端の対話促進など、キューバ革命を健全化する方向に作用しているという。

著者は、民主主義を政治領域に限定することは、市民参加を抑止し、資本主義体制の統治能力の強化をもくろむリベラリズムの歴史的イデオロギーにすぎないと批判する。リベラル派左翼がネオリベラリズムと異なるのは、前者が社会問題への関心を保持している点にあるとみなす。たしかに、選挙の形骸化が進行するなかで、自由な選挙の実施をもって民主体制の定着とみなすリベラル派言説への批判はもっともだが、市民的政治的権利の保障へ向けて歩みだしたラテンアメリカ諸国の現実の政治文脈のなかで、リベラル派を切り捨てるような評価のしかたは、

同派をネオリベラル陣営に追いやり、非歴史的で不毛な二項対立論争への後戻りになりかねない。

他方、革新派は民主主義をリベラリズムとマルクス主義の最良の部分を吸収した「権力の社会化」として捉え、自由選挙の実施と政治的市民的権利の保障からなる第一段階に続く目標に据える。だが、著者はメキシコのPRD左派が描くこのグラムシ流の概念は理論・実践ともにあいまいであり、民衆による富の再分配と経済の管理強化の基盤となるべき多様な社会運動・組織間のネットワークの構築・運営こそが課題であると指摘する。まさにこの点はラディカル・デモクラシー論に通じるものであり、政治社会学や文化批判論からの理論的精緻化が試みられている^(注6)。

キューバでは、「参加主体の多様性と自律性の認知、その結果としてのコンセンサス形成に際しての『対立と紛争の認知』として理解されるブルーリズムの成熟が課題である」という革新派知識人の発言が引用されている。だが、「市民社会の輸出」を反革命戦略の一環として用いる米国政府の敵対政策のもとでは、キューバ社会主義の再生に欠かせないこの課題が、現実にはあくまで現行体制の存続という条件のもとでのみ実現可能であるという点に、キューバにおける革新派が抱えるジレンマが存在する。

社会正義と公正を求める人々が自発的に批判と抵抗を組織して下からの公的領域を構築し、政策決定に影響を及ぼすことこそが、革新派の唱える民主主義の本質であろう。そのためには市民的権利と自由な活動スペースの保障に加えて、異質で多様な主体からなる非均質的な市民社会の現実を認知したうえで、複数の主体と運動を結節し、網の目を作りだして運営する方法の開発が具体的に求められている。この「変革の新たな歴史的主体」と複数の主体の結節という問題は、ラテンアメリカにおける新社会運動論の中心テーマであり、対話の主要項目でもあったはずだが、その結果に関する包括的な議論は本書では示されていない。革新的な言説が与えられさえすれば、ネオリベラリズムに対抗する広範な民衆運動が興隆するというのは、もう一つの幻想にすぎない。すれ違い相反しあう多様なアイデンティティを

もつ複数の主体を繋ぎ止め、結節させる公的領域の構築を目指した柔軟で多様性に富んだ運動のありかたこそが問われているのである^(注7)。

IV

ラテンアメリカ左翼の間では、社会主義を国家による経済統制と関連づけて理解する人々が根強く残っており、これに国家主権を重視する民族主義的開発主義の伝統が加わり、国家中心主義がいつそう強化されてきた。リベラル派は、グローバル資本主義の枠内で市場競争と効率原理を軸とした国民経済の改革と社会的平等の実現を提唱するが、比重は市場競争の強化におかれている。ネオリベラル構造調整がもたらす社会コストを批判しながらも、「民主化は経済的『近代化』、すなわち経済的規律・生産性・競争・企業家精神に依存する」というチリ人社会主義者カルロス・オミナミ(Carlos Ominami)の言葉が、リベラル派のスタンスを象徴している。現在のキューバの文脈では、単一政党制を維持しながらこれを促進しているのが正統派であり、複数政党制と市場経済双方の導入を求めるのが「反革命」とのレッテルを貼られたリベラル社民派である。

革新派は、「市場自体が社会関係に深く埋め込まれている」点を理解しない正統派とリベラル派に対して、連帯・互恵・平等・民主主義という価値が国家・経済・社会の諸制度に完全に埋め込まれているような質的に異なるシステムの構築を目指しているという。著者はメキシコとキューバの革新派は、両国が技術的進歩や合理化を通してではなく民族革命を通して半周辺へ上昇した経験を自負しており、国内の「階級敵」と米国「帝国主義」、ならびに「貪欲」な多国籍企業によってその地位と社会的成果が脅かされているという危機意識をもっているとみなしている。ならば、その対抗策が国家の権限と役割の強化という方向に流れることは容易に想像できる。だが、この点において著者が描く革新派は最大の困難に直面する。リベラリズムとマルクス主義双方を部分的に受け入れ、非資本主義経済を志向する革新派の言説として、本書では民営化に代わる誠実で責

任ある国営部門の運営、選択的な貿易の自由化、財界および米国との相互理解の促進、社会的権利の保障、労働者による純粋な参加と管理という、検証を伴わないあいまいで矛盾した政策志向を例示するに留まっている。また、唯一の具体的な事例として挙げられているのは、メキシコの地峡部で国家との緊張した協力関係を伴いながら進められている地域プログラム(COCEI:地峡部労働者・農民・学生同盟)の成果にすぎない。

民主主義の革新から抽出された「権力の社会化」と国家の権限・役割の強化、ならびにグローバル・リージョナル・ローカル市場経済との三者関係のありかたこそが問われるべき課題である。その理論的な掘り下げなしに「民主的で責任ある誠実な国家の構築」といった、どの政党でも掲げる選挙公約のようなスローガンに逃避することは何も生みださないだろう。著者は、国家主権をめぐる章において、一国ではなく総体としてのラテンアメリカ民族主義に根ざす抵抗とネーションの防衛言説・運動のパワフルな再浮上という現象に着目し、抵抗の歴史の絶えざる掘り起こしを通じた民族主義の再生こそがネオリベラルへの抵抗の基盤となると主張する。だが他方では、民族的言説もグローバリゼーションの現実的挑戦を受けており、何が「ナショナルなもの」を構成し、誰がこれを表象するのかをめぐる論争が沸騰している点を見失ってははいない。左翼言説の革新にとり、民族をめぐる多様な言説が交差する場こそが闘争の中心的な土俵の一つとなるべきであろう。

最終章において、著者はリベラルな政治伝統がもつ最良の部分の民主主義と社会的平等へ組み入れることこそが、左翼パラダイム革新の課題であるというきわめて妥当な結論を提示する。評者はラテンアメリカ左翼の歴史に照らして、この結論を社会的平等を優先する戦略がもたらす失敗のリスクを軽減するという観点から支持したい。双方に失敗の契機が埋め込まれている国家と市場の関係を、社会的な文脈から遊離させたまま論ずるのではなく、ラテンアメリカにおける民族主義と市民社会の変容を分析枠組みに組み入れ、政治的リベラリズムと「権力の社会化」の結合から左翼言説の革新を探究する著者

の方法は、非常に示唆に富むものである。民主主義の深化を通して社会と国家、社会と市場の関係変革を担うべき主体と契機を究明する研究の蓄積が、ラテンアメリカ各国に求められていると思われる^(注8)。

(注1) たとえば *NACLA*, vol. XXXI, no. 1, July/August 1997 におけるラテンアメリカ諸国の代表的左翼知識人・活動家へのインタビュー特集。

(注2) Jorge G. Castañeda, *Utopia Unarmed: The Latin American Left After the Cold War* (N. Y., Alfred A. Knopf, 1993).

(注3) Plinio Apuleyo Mendoza, Carlos Alberto Montaner, Alvaro Vargas Llosa, *Manual del perfecto idiota latinoamericano* (Barcelona: Plaza & Janés, 1996)／飯島みどり「民主主義のための歴史とは何か」(『歴史学研究』720号 1998年)。

(注4) ラテンアメリカ知識人が伝統的に依存してきた活字媒体の限界状況を文化の政治学から考察した論考として、Jean Franco, “What’s Left of the *Intelligentsia*? The Uncertain Future of the Printed Word,” *NACLA*, vol. XXVIII, no. 2, Sep./Oct. 1994

を参照。この視点にたつと、言説の流通手段と受け手の変化に留意せずに言説内容の刷新に傾注するマッカーガンの方法は、言説を通した左翼の刷新という戦略上の限界に輪をかけて多難に思える。

(注5) 詳細な定義については、Immanuel Wallerstein, *After Liberalism* (N. Y.: New Press, 1995), pp. 214-218を参照。

(注6) 千葉真『ラディカル・デモクラシーの地平』新評論 1995年、とくに第3章。

(注7) Sonia E. Alvarez, E. Dagnino, and A. Escobar, eds., *Cultures of Politics, Politics of Cultures: Re-visioning Latin American Social Movements* (Boulder: Westview, 1998).

(注8) ラテンアメリカにおける社会運動の経験をこの観点から論じた研究として、Judith Adler Hellman, “Anniversary Essay on Social Movements: Revolution, Reform and Reaction,” *NACLA*, vol. XXX, no. 6, May/June 1997／William C. Smith and Roberto Patricio Korzeniewicz, eds., *Politics, Social Change, and Economic Restructuring in Latin America* (Boulder: Lynne Rienner, 1997) を参照。

(専修大学経済学部教授)